

延辺地域朝鮮語の談話における文末形式

——親疎関係、話者の属性による差異に注目して——

高 木 文 也

慶應義塾大学

【要旨】 本稿は、延辺地域語の談話における終止形語尾の使用様相について、親疎関係や話者の属性といった社会言語学的観点から分析を行なうものである。分析の結果、以下の4点が明らかになった：

- (1) 延辺地域語における待遇法等級は、概ね4等級に分布しており、下称、略待の使用が多い。また、中称語尾は、40代を下限として10代の発話においては確認されない。
- (2) 延辺地域語の終止形語尾には、他の方言形にはみられない *-s@p-* (謙讓) や *-te-* (目撃), *-ni* (下称) などによる融合、脱落形が多い。これらの語尾は、年代によって出現に差をみせる。
- (3) 共時態としての延辺地域語では、基層変種である咸鏡道方言のほか、60代以上の談話においては、六鎮方言に起源を持つ語尾も使用されている。
- (4) 延辺地域語においては、*-ta* や *-ci* のほか、*-a/e*, *-nya* など、形態は同じであっても、他の多くの方言形とは異なる使用域を持つ語尾が存在する*。

キーワード：中国朝鮮語、談話、文末形式、方言

1. はじめに

中国東北地方 (吉林省, 遼寧省, 黒龍江省) には朝鮮族と呼ばれる民族が居住しており、その多くは朝鮮語による言語生活を営んでいる。彼らの話す変種は、「中国朝鮮語」と呼ばれ、これまでもこれを対象とした研究が一定数、存在してきた。しかし、一連の論考をみてみると、その多くは助詞や語尾について形態・統語論的観点から記述するに留まっており、当該形式の談話場面における使用実態を分析したものは、そう多くない。そこで、本稿では、こうした状況に鑑み、中国朝鮮語の中でも最大の話者人口を持つ吉林省 延辺朝鮮族自治州における変種 (以下、延辺地域語) を取り上げ、談話における終止形語尾の使用様相を、親疎関係や話者の属性といった社会言語学的要因から分析することにする。本稿の分析により、同地域語における終止形語尾の使用域はもちろん、終止形語尾と待遇法の関係の一端が解明されることが期待される。

* 本稿を執筆するにあたり、匿名の査読者の先生方から多くの貴重なご指摘を多くいただいた。ここに記して心より御礼申し上げたい。また、延辺大学の金光洙先生、張成日先生、レインボー通商の宮川淳氏にも様々なご助言をいただいた。併せて感謝申し上げる。なお、本研究は、平成 27、28 年度 科学研究費助成事業の交付を受けて行なわれたもので (研究課題番号：15H06116「朝鮮語延辺方言における発話文生成の研究」)、本稿は、2016年10月2日(日)に開催された第67回 朝鮮学会大会における口頭発表「延辺地域朝鮮語における文末形式の社会言語学的考察」を改稿したものである。

2. 先行研究

本章では、既存の研究における延辺地域語の終止形語尾の記述を概観しておくことにする。なお、本稿で分析する延辺地域語は、主に咸鏡道方言を基層方言とする変種であるため(宣徳五他(1985)),ここでは、咸鏡道方言に関する論考も合わせてみることにする。

郭忠求(1998)は、東北・西北方言を概説した論考で、その中では、咸鏡方言の終結語尾¹について記述している。同論考では、相対敬語法を尊待、平待、下待の3等級に分類したうえで、それらに該当する終結語尾を叙述法、疑問法、命令法、請誘法に分けて記述している。

李基甲(2003)は、東北方言を概説した論考である。同論考では、相対敬語法を *acwu nophim*, *yeysa nophim*, *acwu nacchwum*, *panmal*² の4等級に分類したうえで、それらに該当する *ssikkuth* (語尾) を叙述、疑問、命令、請誘に分けて記述している。

方彩岩(2008)は、延辺地域の韓国語の終結語尾を分析した論考である。同論考では相対敬語法を *hapso* 体, *hao* 体, *hakey* 体, *hayla* 体の4等級に分類したうえで、それらに該当する終結語尾を叙述形、疑問形、命令形、請誘形、感嘆形に分けて記述している。

高紅姫(2011)は、延辺地域朝鮮語の疑問法について分析した論考である。同論考では、相対敬語法を *hapsyo* 体, *hao* 体, *panmal* 体, *hayla* 体の4等級に分類したうえで、それらに該当する終結語尾を平叙文、疑問文、命令文、請誘文に分けて記述している。

3. 研究の枠組み

3.1. 待遇法体系³

本稿では、高木文也(2015)における延辺地域語の終止形語尾の使用状況をふまえ、談話における実現形態としての言語形式を幅広く記述するという観点から、待遇法に上称、中称、下称、略待上称、略待の5等級を設定することにする。

3.2. 調査の概要

本稿では、2016年3月に延辺朝鮮族自治州の中心地延吉市で、筆者が独自に採録した談話の音声・文字化資料の結果を分析対象とする。被験者は、朝鮮族学校出身、あるいは在学中の生え抜きの話者により構成されており、談話採録の枠組みは、

¹ 本章で参考文献について言及する際に使用する言語・方言区画名、術語、形態素の表記は、当該論文におけるものに従う。

² 本稿では、現代朝鮮語のハングルは *yale* 式で、中期朝鮮語のハングルは、福井玲式により転写する。

³ 韓国で尊待法、聴者待遇、相対敬語法、中国や北朝鮮で *malchalim*、階称と呼ばれる範疇を本稿では以降、待遇法と呼ぶことにする。また、韓国で終結語尾、中国や北朝鮮で *may-cumtho*、終結 *tho* と呼ばれる文法範疇については、終止形語尾と呼ぶことにする。

以下に示すとおり、参加者の性別、年代、親疎関係といった社会言語学的要因を考慮したうえで設定された同年代の2者間談話になっている。

表1 談話採録の枠組みと被験者情報（性別の左側は年齢）⁴

	10代	40代	60代
初対面談話 (疎)	Y1 18/男(YN1) - 18/男(YN2)	Y4 45/男(YN7) - 45/男(YN8)	Y7 64/男(YN13) - 60/男(YN14)
	Y2 18/女(YN3) - 18/女(YN4)	Y5 45/女(YN9) - 44/女(YN10)	Y8 65/女(YN15) - 65/女(YN16)
	Y3 18/男(YN5) - 18/女(YN6)	Y6 44/男(YN11) - 45/女(YN12)	Y9 64/男(YN17) - 60/女(YN18)
友人談話 (親)	Y10 18/男(YN19) - 18/男(YN20)	Y13 45/男(YN25) - 44/男(YN26)	Y16 60/男(YN31) - 60/男(YN32)
	Y11 18/女(YN21) - 18/女(YN22)	Y14 45/女(YN27) - 45/女(YN28)	Y17 58/女(YN33) - 58/女(YN34)
	Y12 18/男(YN23) - 18/女(YN24)	Y15 45/男(YN29) - 44/女(YN30)	Y18 60/男(YN35) - 60/女(YN36)

4. 分析

本調査で採録された談話の総発話文数は、8,285発話で、このうち文末に終止形語尾が現れた発話は、4,649発話（56.1%）であった。談話全体では計44種の終止形語尾の出現が確認され、下称は2,247発話（48.3%）、略待は1,398発話（30.1%）、上称は570発話（12.3%）、中称は411発話（8.8%）、略待上称は23発話（0.5%）が確認された⁵。

4.1. 上称の終止形語尾

4.1.1. -mta/sumta, -mka/sumka

-mta/sumtaは、上称・平叙形（まれに疑問形）、-mka/sumka [m²ka/sum²ka]は、上称・疑問形の終止形語尾である。いずれも咸鏡道（東北）方言に基層をおく語尾で（Kim Yenghwang (2013)）、-mnita(ka)/sumnita(ka)から/ni/が脱落した形である。-mta(ka)は母音／L語幹（L脱落）に、-sumta(ka)は子音語幹に結合し、接尾辞とは-ass/ess-, -kays-, -cay-⁶との共起が可能である。これらの語尾は、いずれも親疎関係では疎、性別では女性の話者によって使用されることが多く、ソウル方言をはじめとする多くの方言において上称の語尾が主に男性により用いられることは対照的である。

⁴ 年代については、便宜上、10代、40代、60代とし、年代内で若干の年齢差があることは、とりあえず考慮しないこととする。なお、分析地域の言語使用の複雑さを考えたとき、話者の言語環境（例えば、両親の言語変種、漢族との交際の程度、韓国への渡航の程度など）による言語使用への影響に関しても詳細に分析をする必要があると考えるが、これについても本稿では、主たる分析対象とはせず、今後の課題としたい。

⁵ 略待上称は、生起比率が低かったため、以降では、主たる分析対象から除外する。

⁶ 接尾辞-kays-は、中部方言の-keyss-（蓋然性）に該当するものである。また、-cay-（否定）は、呉仙花（2015）が示すとおり、-ci anih@- > -ci anih-（縮約）> -ci aynih-（ウムラウト）> -cay nih-（統合）> -cay ih-（脱落）> -cayh-（縮約）> -cay-（脱落）という過程を経て変化したものである。

4.1.2. -pteyta/supteyta

-pteyta/supteyta は、上称・平叙形（過去回想）の終止形語尾で、-pteyta は母音／L 語幹（L 脱落）に、-supteyta は子音語幹に結合する。接尾辞とは -ass/ess-, -kays-, -cay- などとの共起が可能である。また、実際の談話では、親疎関係では疎、年代では 40 代以上、性別では女性の話者によって使用されることが多い。この語尾は、「-s@p-（謙讓）+ -te-（目撃）+ -qi-（恭遜）+ -ta」が融合（fusion）⁷した形で、本調査では、疑問形である -pteyka/supteyka の出現も確認された。

4.1.3. -kkwuma/sukkwuma

-kkwuma/sukkwuma は、上称・平叙形の終止形語尾である。-kkwuma は母音／L 語幹（L 脱落）に、-sukkwuma は子音語幹に結合し、接尾辞とは -ass/ess-, -kays-, -cay- などとの共起が可能である。この語尾は、Han Yengswun（1974）では、感嘆の終止形語尾 -kwuman の /n/ 脱落形が濃音化したものであるとみているが、当地域において -ptekwuma/suptekwuma という語尾が存在することを考えたとき、むしろ「-s@p-（謙讓）+ -kwuma」の融合形であるとみるのが妥当であろう⁸。なお、この語尾は、実際の談話においては、親疎関係では疎、年代では 60 代以上、性別では男性の話者によって使用されることが多いが、第 2 章でみた郭忠求（1998）、李基甲（2003）に記述がみられないことからわかるように、咸鏡道（東北）方言ではなく、六鎮方言⁹における上称の終止形語尾である。

4.1.4. -mtwu/sumtwu

-mtwu/sumtwu は、上称・疑問形の終止形語尾である。-mtwu は母音／L 語幹（L 脱落）に、-sumtwu は子音語幹に結合し、接尾辞とは -ass/ess-, -kays-, -cay- などとの共起が可能である。この語尾は、黄大華（1998）では、「-op-¹⁰ + -n@ntong > -omnuntong > -omtong(twung) > -mtwung > -mtwu」という過程を経て変化したものであるとみており、親疎関係では疎、年代では 60 代以上、性別では男性の話者によって使用されることが多い¹¹。なお、この語尾は、4.1.3. でみた -kkwuma/sukkwuma とともに、六鎮方言における上称の代表的終止形語尾であるが、当語尾

⁷ 李智涼（1993）では、融合を「連結形で完全な単語に音節数減少が起り、依存要素として再構造化する現象」（筆者訳）と定義している。

⁸ -ptekwuma/suptekwuma は、-pkwuma/supkwuma と目撃法が共起した終止形語尾である。この形式は、4.1.2. でみた目撃法が融合した形式 -pteyta/supteyta とは異なり、男性の話者によって使用されることが多い（郭忠求（2014）では、六鎮方言の -pteyta/supteyta は -ptekwuma/suptekwuma に比べ、使用頻度が低いとしているが、本調査においては、むしろ前者の使用がより多く確認された）。なお、-kwuma は、黄大華（1998）も指摘するように、-kwuman の非強調形である（/n/ が添加されることで強調の意を帯びる）。

⁹ 咸鏡北道北部に位置する穩城、鍾城、会寧、慶源、慶興、富寧といった地域で使用される変種の総称。

¹⁰ -s@p-（謙讓）の異形態。

¹¹ 本調査では、-mtwu/sumtwu が -te-（目撃）と共起した -ptentwu/suptentwu の出現も確認された。

を使用する話者は、やはり平叙形においても -kkwuma/sukkwuma を使用するという相関関係がみられた。

4.2. 中称の終止形語尾

4.2.1. -o/so

-o/so は、中称・平叙形、疑問形、勧誘形、命令形の終止形語尾で、実現されるイントネーションによって、意味が弁別される。-o は母音／L 語幹 (L 脱落) に、-so は子音語幹に結合し、接尾辞とは -ass/ess-, -kays-, -cay- などとの共起が可能である。また、実際の談話においては、親疎関係では疎、年代では 40 代、性別では男性の話者による使用が多く、4.1.1. でみた上称・平叙形、疑問形の終止形語尾 -mta (ka) /sumta (ka) が女性によって多く使用されていたことは、対照的である¹²。

4.2.2. -ptey/suptey

-ptey/suptey は、中称・平叙形、疑問形 (過去回想) の終止形語尾で、実現されるイントネーションによって、意味が弁別される。-ptey は母音／L 語幹 (L 脱落) に、-suptey は子音語幹に結合し、接尾辞とは -ass/ess-, -kays-, -cay- などとの共起が可能である。親疎関係では親、年代では 60 代の話者によって使用されることが多い。なお、この語尾の生成に関しては、李基甲 (1997) では、上称の終止形語尾 -pteyta/supteyta から -ta が脱落したものとみているのに対し、黄大華 (1998) では、「-s@p- (謙讓) + -te- (目撃) + -ita」の融合形であるとみており、その見解は研究者により一致していない。

4.3. 下称の終止形語尾

4.3.1. -ta

-ta は、下称・平叙形の終止形語尾である。動詞の場合、母音／L 語幹 (L 脱落) には -nta が、子音語幹には -nunta が結合し、形容詞、指定詞、存在詞の語幹には -ta が結合する。接尾辞とは -ass/ess-, -kays- などとの共起が可能である。この語尾は、全ての終止形語尾の中で最も多い出現をみせており、親疎関係では親、年代では 10 代の話者によって使用されることが多い。なお、このように 10 代における出現数が多いのは、延辺地域語における 10 代の話者 (学生) は、初対面においても下称の終止形語尾を多用する傾向が強いということによる。

4.3.2. -cay

-cay は、下称・平叙形の終止形語尾である。語幹の種類を問わず結合し、接尾辞とは -ass/ess- などとの共起が可能である。この語尾は、接尾辞 -cay- に下称の終止

¹² 延辺地域語の -o/so は、ソウル方言のそれと同様に、丁重に待遇すべき目下の話者に対して使用される場合もあるが、この他に成人以上の話者が同年代同士の会話で使用する場合にも用いられている。本調査では、親の場面における出現も確認された。

形語尾 *-ni* が融合したもので¹³、全体としては「*-ci anhni*」(～ではないのか)ほどの意味を表す。親疎関係では親、年代では10代、性別では男性の話者によって使用されることが多い。なお、この語尾は、特に40代以下の話者の発話では、存在詞 *is-* (ある) と結合した「*~ iscaj*」という形で使用されることが多く、談話全体における出現数では、全370の用例中、77例(20.8%)を占めた。これは、ソウル方言における「*isscanha*」のように談話標識化した表現であると考えられる。

4.3.3. *-ni, -ya*

-ni, -ya は、いずれも下称・疑問形の終止形語尾である。このうち、*-ya* は、用言との結合規則や、使用域、さらには疑問形でのみ使用されるという事実を考えたとき、略待語尾 *-a/e* の異形態というよりは、*-nya* に近く、*-nya* の */n/* 脱落形である可能性が高い¹⁴。これらの語尾は、いずれも親疎関係では親、年代では10代、(*-ya* の場合)性別では男性の話者によって使用されることが多い。なお、本調査では、*-nya* の出現は確認されなかったが、高紅姫(2011)における記述を参照しながら、*-ni, -ya, -nya* の特徴を用言、接尾辞との結合、使用する話者の年代という観点から整理すると、表2のようになる。

表をみると、*-ni, -ya, -nya* は、いずれも語幹の種類を問わず結合し、L語幹ではLが脱落することがわかる。なお、このうち *-ya* に関しては、子音語幹との結合に制限があり、語幹末が *h* で終わる用言とのみ共起が可能であることが確認された¹⁵。また、接尾辞との結合については、*-ni* と *-nya* は、いずれの接尾辞とも結合が可能であるのに対し、*-ya* は、*-cayi-* とのみ共起が可能であるという違いをみせる。さらに、本調査では *-ni, -ya* は、広い年代の話者によって使用が確認された一方で(特に10代の話者によって多く使用される)、*-nya* は1例も確認されなかった。フォローアップ調査によると、このような出現差がみられるのは、*-nya* は老年層の話者が、目下の相手に対して使用するという厳しい制約を持つ語尾であるため、10

¹³ *-cay-* が終止形語尾と結合することにより、*-cay* のほかにも *-caymta, -caymka* (以上、上称)、*-cayo, -cayhso* (以上、中称)、*-cayiya, -cayya, -cayni* (以上、下称)などの文末形式が生成される(*-cay/cayi-* は、本来は *-cayh/cayih-* であるが、*n, m, ø* (ゼロ子音)で始まる語尾類が後接した際に、音節末の *h* が脱落するという特徴により形成されたものである。すなわち、*-cay-* と *-cayh-*、*-cayi-* と *-cayih-* は、共時的には異形態である)。

¹⁴ これは、音韻論的観点からみると、延辺地域語では、語中において子音 */n/* が、母音 */ya, ye, yo, yu, i/* の初声となった場合に脱落することがある(全学錫(1996))という音韻規則が適用された結果であるともみることができる。こうした規則について、全学錫(1996:130)では、*kunyang* [*kunjan* > *kujan*] (何となく) *chengnyen* [*ʃʰənɲjɔn* > *ʃʰənɲɔn*] (青年)といった用例が提示されている。ただし、*-nya* と *-ya* は、その共時的な出現分布においては、少なからぬ差異も存在することから、*-nya* > *-ya* という変化過程を証明するためには、さらなる通時的分析が必要である。なお、本調査では、*-ni* が *-i* で出現する例は、確認されなかった。

¹⁵ 本調査では、いわゆる *h* 変格用言と結合した用例のみが確認され、*etteya?* (< *etteh-* + *-ya*)、*kuleya?* (< *kuleh-* + *-ya*)といった活用形をみせた。なお、当地域では、*-ni, -nya* に関しても、子音語幹に結合する際に、媒介母音 *-u-* を伴わないのが普通であるため、項目名としては、それを挿入して提示していない。

代や 20 代といった若年層の話者によっても使用されうるソウル方言などとは、大きな違いをみせている。

表 2 延辺地域語における -ni, -ya, -nya の使用様相

		-ni	-ya	-nya
用言+	母音語幹	-ni	-ya	-nya
	L 語幹	-ni (L 脱落)	-ya (L 脱落)	-nya (L 脱落)
	子音語幹	-ni	-ya ※限定的	-nya
接尾辞+	-ass/ess-	○	×	○
	-te-	○	×	○
	-kays-	○	×	○
	-cayi/cay-	○	○	○
話者の世代		10 ~ 60 代	10 ~ 60 代	老年層

4.3.4. -a/e

-a/e は、ソウル方言に多くみられる略待の語尾と形態こそ同じであるが、その使用域は異なり、下称・平叙形、疑問形の終止形語尾として使用される¹⁶。この語尾は、年代では 10 代、性別では男性の話者によって使用されることが多い。

4.3.5. -nun/(u)nmay

-nun/(u)nmay は、下称・平叙形の終止形語尾である。-nun/(u)n- の部分は、動詞、形容詞、指定詞の現在連体形の結合規則に準じ、接尾辞とは -ass/ess-, -kays- などとの共起が可能である。この語尾は、当地域で独自に発達した語尾で、-nun/(u)n moyangi- (～ようだ) が、「-nun/(u)n moyangi- > -nun/(u)n moi- (脱落) > -nun/(u)n may- (縮約) > -nun/(u)n may (切断, 融合)」という過程を経て終止形語尾化したものである(呉仙花 (2015))。親疎関係では親、年代では 10 代、性別では男性の話者によって使用されることが多い。

4.4. 略待の終止形語尾¹⁷

4.4.1. -ci

-ci は、略待・平叙形、疑問形、勧誘形、命令形の終止形語尾で、実現されるイ

¹⁶ 高木丈也 (2015) では、この語尾について、-ass/ess- (過去) が開音節化したものであるとのみ指摘しているが、崔明玉 (2011) では、平安北道雲田地域語の疑問形終止形語尾 -an- について、-ass/ess- (過去) と -ney, -ni, -nya (頭子音に n を持つ下称疑問形の終止形語尾) の融合により生成されたものであるとしながら、この生成過程を -as|v- → -at'nv- → -an'nv- → -an'n- → -an- (接尾辞の形態素表記は、崔明玉 (2011: 223) による。v = 母音素) のように想定している。延辺地域語の -a/e は、ここからさらに -n- が脱落したものとみることができらるだろう。

¹⁷ 本来、略待が存在しないとされてきた延辺地域語 (東北方言) において略待の語尾が確認される要因としては、学校教育による北朝鮮の標準語 (平壤文化語) の浸透、韓国との人的往来や文化接触の拡大によるソウル方言の浸透が考えられる。

ントネーションによって、意味が弁別される。この語尾は、語幹の種類を問わず結合することができ、接尾辞とは -ass/ess-, -kays-, -cayh- などの共起が可能である。年代では、40代の話者によって使用されることが多い。なお、ソウル方言における -ci は、略待を代表する語尾として、主に対等、あるいは目下の対話者に対して使用されるが、延辺地域語における同語尾は、友人談話（親）のみならず、初対面談話（疎）でも同程度の出現数をみせており、より広い使用域を獲得している¹⁸。

4.4.2. -cimwu

-cimwu は、略待・平叙形、疑問形、命令形の終止形語尾で、実現されるイントネーションによって、意味が弁別される。語幹の種類を問わず結合し、接尾辞とは -ass/ess-, -kays-, -cayh- などの共起が可能である。この語尾は、当地域で独自に発達した語尾で、「-ci, mwe」が融合したものであると思われる。話者によっては、[ʃimw], [ʃimun], [ʃim] のように実現することもある。なお、4.4.1. でみた -ci は、親、疎ともに同程度、使用されることが確認されたが、-cimwu に関しては、どちらかという疎の場面で多く使用されることがわかった。

4.5. 親疎関係、話者の属性による待遇法の出現

4.1. から 4.4. では、延辺地域語の談話に現れる終止形語尾を待遇法等級ごとに概観してきた。本節では、以上の分析をふまえて、親疎関係や話者の年代、性別という社会言語学的要因が待遇法等級の出現にどのような影響を与えているかを分析することにする。以下の表3は、親疎関係、年代、性別による待遇法等級の使用分布を示したもので、表4は、表3をもとにカイ二乗統計値、 p 値を算出したものである。

まず、親疎関係について表4をみると、下称、上称、中称において有意差を示していることがわかる。また、表3をみると、下称の終止形語尾は親の場面で、上称、中称の終止形語尾は疎の場面で相対的に高い生起比率を示しており、他の多くの方言と共通した特徴を示していることが確認される。一方で、略待においては有意差をみせておらず、親疎という場面差が、その使用に影響を与えないことがわかるが、このような結果を示すのは、当地域語においては、-ci や -cimwu といった語尾が、友人談話（親）のみならず、初対面談話（疎）においても使用されうるといった特徴と関係が深い。ところで、本調査の分析においては、上述の結果と相反して、下称の語尾が疎の場面で出現したり、中称の語尾が親の場面で出現する、という用例も一定数、得られた。これは、-ta（下称）や、-o/so（中称）など、他方言とは異なる使用域を持つ語尾が存在することによるものである。

また、年代について表4をみると、下称、略待、上称、中称、全ての等級におい

¹⁸ このように格式の場面で使用される -ci は、親しみを表出するための方略として使用されるものである。なお、本調査では、咸鏡道方言に現れる終止形語尾 -cipi の使用は、確認されなかった。

て有意差を示していることがわかる。また、表3をみると、下称の終止形語尾は10代の発話で、略待、および上称の終止形語尾は60代の発話で、中称の終止形語尾は40代の発話で相対的に高い生起比率を示していることがわかるが、このうち、下称の終止形語尾が10代の発話で多いのは、当該の年代で -ta や -cay の使用が多いこととの関係が深い。ところで、中称の終止形語尾は、40代の発話において多く出現しているのに対し、60代の発話においては、その使用が相対的に少なくなっているが、これは、60代にあっては、六鎮方言を基層とする上称の語尾を使用する話者が存在したことが1つの要因となっている。なお、年代による各等級の生起比率をみると、10代は、40代、60代と比べ、その分布範囲が狭くなっている（偏っている）ことがわかる。このことは、例えば、10代における中称語尾の生起比率が0%であることをみてもわかるように、当地域語の終止形語尾の体系が大きく変容していることを示すものである。

表3 親疎関係、年代、性別による待遇法等級の使用分布

等級 (形態数)	親疎関係		年代			性別		合計
	親	疎	10代	40代	60代	男	女	
下称(15)	1625(65.0%)	622(28.9%)	1388(75.6%)	529(31.8%)	330(28.7%)	1216(48.4%)	1031(48.2%)	2247(48.3%)
略待(11)	765(30.6%)	633(29.5%)	376(20.5%)	586(35.2%)	436(37.9%)	769(30.6%)	629(29.4%)	1398(30.1%)
上称(11)	13(0.5%)	557(25.9%)	70(3.8%)	226(13.6%)	274(23.8%)	176(7.0%)	394(18.4%)	570(12.3%)
中称(2)	96(3.8%)	315(14.7%)	0(0%)	321(19.3%)	90(7.8%)	349(13.9%)	62(2.9%)	411(8.8%)
略待上称(5)	1(0.0%)	22(1.0%)	1(0.1%)	2(0.1%)	20(1.7%)	2(0.1%)	21(1.0%)	23(0.5%)
合計	2500(100%)	2149(100%)	1835(100%)	1664(100%)	1150(100%)	2512(100%)	2137(100%)	4649(100%)

表4 カイ二乗統計値、 p 値

	親疎関係			年代			性別				
	カイ二乗 統計量	自由度	p 値	カイ二乗 統計量	自由度	p 値	カイ二乗 統計量	自由度	p 値		
下称	600.18	1	.000	下称	907.87	2	.000	下称	0.01	1	0.936
略待	0.67	1	0.414	略待	134.68	2	.000	略待	0.71	1	.400
上称	690.65	1	.000	上称	267.37	2	.000	上称	139.19	1	.000
中称	166.47	1	.000	中称	404.91	2	.000	中称	171.76	1	.000
略待上称	20.76	1	.000	略待上称	48.14	2	.000	略待上称	17.34	1	.000

最後に性別について表4をみると、上称、中称において有意差をみていることがわかる。また、表3をみると、上称の終止形語尾は女性の発話で、中称の終止形語尾は男性の発話で相対的に高い生起比率を示していることがわかるが、これは、当該の性別で -mta(ka)/sumta(ka) (上称)、-o/so (中称) の使用が多いこととの関係が深い。なお、上称、中称の語尾は、若年層においては多く使用されないことを鑑みたとき、性別による言語使用の差は、老年層ほど大きく、若年層においては縮小の方向に向かっているということもわかる。

以上のように、延辺地域語の待遇法等級は、談話全体としては、概ね4等級に分布しており、その下位項目である終止形語尾は、親疎関係、年代、性別といった社会言語学的要因により、異なる使用域、出現様相をみせることが確認された。

5. 結論

本稿では、延辺地域語の談話における終止形語尾の使用様相について、親疎関係や話者の属性といった社会言語学的観点から分析を行ってきた。分析の結果、明らかになったことは、以下の4点に要約される。

1点目としては、延辺地域語における待遇法等級は、談話全体としては、概ね4等級に分布しており、下称、略待の使用が多いことが確認された。これは、-ta や -ci といった形式が、友人談話（親）のみならず、初対面談話（疎）においても使用されうるといふ当地域語の特徴を反映したものである。また、本調査では、中称語尾は、40代を下限として10代話者の発話においては確認されておらず、10代においては、40代、60代と比べ、待遇法の分布範囲が狭くなっていることがわかった。2点目としては、延辺地域語の終止形語尾には、他の方言形にはみられない融合、脱落により生成された形式が多いことが確認された。具体的には、以下のような形式である：

1. 【-s@p-（謙譲）】 + 【-te-（目撃）】 + 【終止形語尾】の融合形：
 - pteyta/supteyta（上称） -ptentwu/suptentwu（上称）
 - ptey/suptey（中称）
2. 【-s@p-（謙譲）】 + 【終止形語尾】の融合形：
 - kkwuma/sukkwuma（上称） -mtwu/sumtwu（上称）
3. 【接尾辞】 + 【-ni（下称）】の融合形：
 - cay（< -cay- + -ni）（下称） -a/e（< -ass/ess- + -ni）（下称）
4. その他の融合形：-nun/(u)nmay（下称） -cimwu（略待）
5. 脱落形：-mta/sumta（上称）

このうち、-s@p-の融合形(1, 2)は、40代以上の談話で、「接尾辞+ -ni」の融合形は、10代の談話で多く使用されることが確認された。なお、-nun/(u)nmay や -cimwu, -a/e（下称）といった形式は、基層方言の記述には、みられないもので、分析地域において独自に発達した語尾であると思われる。3点目としては、共時態としての延辺地域語では、基層変種である咸鏡道方言のほか、60代以上の談話においては、六鎮方言に起源を持つ語尾も使用されていること、さらには（特に40代の談話においては）ソウル方言の影響も散見されることが確認された。ソウル方言の影響は、主に略待において確認され、略待上称の使用は、極めて少ないことも確認された。4点目としては、延辺地域語においては、形態は同じであっても、他の多くの方言形とは異なる使用域を持つ語尾が存在することが確認された。-ta や -ci のほか、

-a/e (下称), -nya などがあるが、こうした語尾は、親疎関係や話者の属性といった点において、他方言とは、異なる出現をみせることがわかった¹⁹。

このように同時代の延辺地域語の談話にみられる終止形語尾は、基層方言のそれを一部、維持しながらも他変種の影響も受け、独自の使用域を持つ語尾体系を構築していることが確認された。ただし、本調査では、同年代の話者同士における談話の分析に留まったため、今後は、さらなるデータを確保しながら、分析を行なっていきたい。

参 照 文 献

- 高木丈也 (2015) 「延辺地域朝鮮語における友人談話の発話形式—文末形式におけるソウル方言との比較から—」『韓国語学年報』11: 47-86.
- 高紅姫 (2011) 『延辺地域朝鮮語 疑問法研究』, 山東大学校 外国語学部 朝鮮(韓国)学研究叢書 4. 瀋陽: 遼寧民族出版社.
- 郭忠求 (1998) 「東北、西北方言」徐泰龍・閔賢植・安明哲・金倉燮・李智涼・林東勳(編)『文法研究と資料—李翊燮先生 還暦記念論叢—』985-1028. ソウル: 太学社.
- 郭忠求 (2014) 「六鎮方言の終結語尾と聴者敬語法」『方言学』20: 195-233.
- 金榮晁 (2013) 『朝鮮語方言学 (改訂)』, 梨花多文化叢書 北韓語 1. ソウル: 太学社.
- 方彩岩 (2008) 「延辺地域の韓国語 終結語尾研究」修士論文, 大邱大学校.
- 呉仙花 (2015) 『延辺方言研究』ソウル: 博文社.
- 李基甲 (1997) 「韓国語諸方言間の相対敬語法比較研究」『言語学』21: 185-217.
- 李基甲 (2003) 『国語方言文法』ソウル: 太学社.
- 李智涼 (1993) 「国語の融合現象と融合形式」博士論文, ソウル大学校.
- 全学錫 (1996) 『朝鮮語方言学』延吉: 延辺大学出版社.
- 崔明玉 (2011) 「平安北道 雲田地域語の叙法について」『方言学』11: 207-250.
- Han, Yengswun (1974) 『朝鮮語方言学』平壤: 金日成総合大学出版社.
- 黄大華 (1998) 『朝鮮語東西方言比較研究』ソウル: 韓国文化社 (影印).
- 宣徳五・金祥元・趙習 (1985) 『朝鮮語簡志』北京: 民族出版社.

執筆者連絡先:

[受領日 2016年8月2日

〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322

最終原稿受理日 2017年8月9日]

慶應義塾大学 総合政策学部

e-mail: ttakagi@sfc.keio.ac.jp

¹⁹ このような使用域の差異が存在するという事実は、延辺地域語の待遇法の設定自体を再考する必要があることを示唆するものである。

Abstract

**Final Ending Forms in Conversations in Yenpyen-region Korean:
With a Focus on Differences by Degree of Intimacy
in Relations and Attributes of the Speaker**

TAKEYA TAKAGI

Keio University

This study analyzed aspects of final-ending usages in Yenpyen-regional dialect conversations from the perspective of sociolinguistics, such as degree of intimacy in their relationships and the attributes of the speaker. The analysis elucidated the below four points:

(1) In the Yenpyen regional dialect there are, generally, four speech levels of the gearer-oriented honorific System. Hayla-chey and Hay-chey are often used. Hao-chey final endings have not been confirmed in speech for their 10s, with their forties at the lower end. (2) In final endings in the Yenpyen regional dialect, there is frequently a fusion and omission not seen in other dialects, in such forms as -s@p- (modesty), -te- (witnessing), and -ni (Hayla-chey). These final endings appear differently according to the age of the speaker. (3) In the synchronous Yenpyen dialect, aside from the substratum Hamkyengto dialect, in conversations in their sixties and above, final endings originating from the Lyukcin dialect are used. (4) In the Yenpyen dialect, even if forms such as -ta, -ci, -a/e-, and -nya are the same, there are final endings with registers different from many other dialect forms.